

今月の川内家

長男、優輝が81回目のマラソンでボストン優勝

「100年に1度のチャンスを活かすことができた」

4月16日のボストンマラソンで優勝した川内優輝選手が、レース中の心境や帰国後のプロ宣言の真意を語ります



2時間15分58秒でゴールテープを切った 写真：AP / アフロ

今回のボストンマラソンで優勝できたことは、マラソンだけでなく、それ以外のレースをすべて含めた陸上競技生活の中で一番うれしい瞬間でした。寒さと雨に向かい風という私にとって絶好の条件の中で、これまでに走った80回のフルマラソンの経験すべてを活かしたレースでした。

レース前夜に

先頭でゴールする想像ができた

ボストンマラソンからはこれまでも何度かオファーをいただいていたのですが、スケジュールが合わず、なかなか出場できませんでした。そんな中、昨年、ビル・ロジャースさん（※）からブレット・ラーナー氏経由で「出てほしい」という動画メッセージをいただき、すごく光栄に思い、出場を決めました。

私のベストタイムは出場選手中11番目。2時間4〜6分台を持つアフリカ勢も多数出場していました。ですので、通常のコンディションであれば優勝できなかったでしょう。ただ、現地については当日の予想気温が日に日にどんどん下がっていききました。私は寒いレースと雨のレースが得意ですので、過去の自分のレース戦績を再確認し



多くの有力選手がウインドブレーカーを着たが、寒さに強い川内選手はランシャツランパンで走り続けた (A.P./アフロ)

いましたが(笑)。レースで注目されていたのは、昨年2位でリオデジャネイロ五輪銅メダリストのゲール・ラップ選手でした。ラップ選手は事前に昨年優勝したシカゴマラソンのように終盤でロングスパートをすると言っており、周りの選手全員がラップ選手をマークしていました。だからこそ、私はスタートから飛び出しました。これは日本人初優勝を果たした2013年の雪の長野マラソンの経験があったからです。この時はとても寒いレースで、スタートに向かう前に実業団の監督が「寒いからラスト勝負になる。30kmまではウォーミングアップのつもりでリラックスして走れ」と話しているのが聞こえてきました。それで私は逆の展開にするために入念にアップをして、スタートから飛び出して集団の人数を絞り、主導権を握って優勝することができたのです。

てからは何の不安もなく走れました。最後に「右へ行け」と言われ「ああ、優勝か」と

最近のレースでは、私は呼吸がきつくなって失速することが多いのですが、今回はペースが遅かったことが幸いしてとても呼吸が楽でした。そして、今回のような脚を削り合う筋力勝負なら3〜4時間ジョグや長時間のトレイルランもやっているの自信がありました。それで、集団に戻ると下り坂や他の選手の揺さぶりに合わせて、何度もスパートをしました。氷点下のダウンヒルは、箱根駅伝6区を経験していたので怖くありませんでした。「泥仕合にする」と決意していた私と異なり、ラスト勝負を想定していた他の選手たちは、最初から飛び出されるし、その後も揺さぶりでぐちゃぐちゃなレースにされるし、寒くてスタミナが削られていくし、想定外のことばかりで、不安で不安でしょうがなかったのではないかと思います。そして、何度目かのスパートで集団が縦長になったハートブレイクヒルの3つ前の坂あたりで周りの選手が「ラップが落ちた」と話していたんです。それ

「寒い雨のレースでは今まで一度も失敗していない。100%成功している。だから今回のポストンも必ず良い結果が出ると思うし、もしかしたら1%ぐらい優勝できるかもしれない」と前夜には先頭で「Yuki Kaw

ただ、ポストンでは同じようには行かず、10km手前で集団に追いつかれて一気に突き放され、「長野の作戦は世界のトップには通用しなかったか」と一瞬弱気になりました。しかし、先頭集団が牽制しあったことでペースが落ちて、再び追いつ

家族が語るポストン優勝①

80回の試行錯誤と「大胆さ」と「勇気」を感じた

兄とはよく一緒に練習をするのですが、同じメニューはついていけないので「時差」方式。9000mのペース走(キロ3分7〜8秒)なら5000m地点で合流し、ラスト1000mを2分50秒で競り合います。私が勝つこともあり、そのときは悔しいそう。ただ兄のすごさは、練習の120%を本番で出せること。またレースでは毎回、3〜4バターの展開プランを用意して、相手の出方や状況によって変えているようです。ポストンで仕掛けられたのは、試行錯誤を80回コツコツと繰り返してきて裏づけがあったからだと思います。でもそれを信じて、世界トップクラス相手に実行した「大胆さ」と「勇気」は、兄ながら素直にかっこいいと思いました。(次男、鮮輝さん)

グループで走ることができ、その時に表彰台を確信しました。その後、2位グループから坂の下りを使って抜け出しました。ポストンで単独2位を走っていると想像できなかった。30年前は瀬古さんもこんな風景を見ていたのかな。「自分は本当に今日このポストンを走るために生まれてきたのでは

からならないような変な感覚もありました。マラソンは経験が大切だと思っています。直近では、今年の正月に走ったマイナス17℃のマシューフィールドニューイヤーズデイマラソン(ポストン郊外)が寒さ対策になりましたし、3月の台湾の新北市萬金石マラソンでは今回同様にアフリカ勢を相手に意表をついて、最初から飛び出してそのまま逃げ切った優勝したので、飛び出しの経験もしていました。もつと言うと、寒さでは先ほど述べた長野や2010年の東京、2016年のチューリッヒ、アプダウンではNHAやいぶすきや隠岐と、これまで走ってきたあらゆるレースの経験を發揮できました。この100年に一度のチャンスを活かすことができ、本当に良かったです。

以後は自分でロンドンロス、と呼ぶほっかりと心に穴が開いた状態でした。それは、このロンドンへの準備で、最近の自分にはなかった、「マラソンでここまでやれるか」という熱い気持ちに戻ってきたからでしょう。そして、ロンドンロスが抜けるとこの思いもあって、毎日毎日悩むようになりました。自分がロンドン遠征中のようにマラソンのことだけを考えると、自分が頭の中で思い描いているとおりに競技に取り組むことができる、プロランナーになっただけでいいかならうと。その思いの弱さには弟の鮮輝の存在もありました。普段一緒にジョグをしている、私が仕事があるからと目標値を下回る距離で切り上げて、彼はそのまま予定通りの距離まで走る。そして私が仕事をしている時間をケアに当てている。ああやってきたらいいなと思うようになった。そして、昨年12月の福岡国際で彼が2時間18分の

家族が語るポストン優勝②

「いつも最後まで全力」が優勝につながったと思う

現地に入ってから段々と天候が悪くなるのを見て「上位に入るかも」と思いましたが、まさか優勝するとは思いませんでした。家でレースの中継を見ていてトップでゴールした時は、不思議な気持ちになりました。普段どんなに調子が悪くても、どんな小さなレースでも、最後まで全力で走っている姿勢が今回も生きていたのでしょう。小さいころには私から

「最後まで力を抜かないで走りなさい」と話していたんです。プロについてはそれとなく話していましたが、「このタイミングで話すのか」と驚きました。ここまで公務員ランナーとしてやってきたので続けてほしかった気持ちもありますが、後悔するよりも自分で決めたことをやり遂げてほしいです。(母、美加さん)

ただ、最後まで優勝はわからなかったです。キルイ選手らしき選手を抜いた時、周りに女子選手もいましたし、向こうはかなりペースが落ちていたので「キルイ選手だったかな。いや、こんな簡単に抜けるわけはないだろう」と考えました。優勝を確信したのは最後の直線100mか200mで係員に「右へ行け」と言われたとき。事前にテクニカルミーティングで優勝者は右、それ以外は左と聞いていたので「ああ、優勝か」と。でも油断して最後にかわされるのが怖くて、ただ前だけを向いて駆け抜けました。

ロンドン世界陸上と弟の活躍がプロ宣言の源に

帰国後に私は来年度からの「プロ宣言」をしました。プロになろうと強く思うようになったのは、昨年のロンドン世界陸上に向けて本気で取り組んだ後です。本番に向けて、月1回海外マラソンに出場し続け、自分の思うように準備を積んできた

大幅な自己ベストを出しました。彼も会社員時代にはベストを更新できず、ずっと大学時代の記録でした。それを一気に更新したので、同じレースで惨敗した自分には衝撃でした。そして、自分も同じような生活をすればまだ彼のように一気にいけるのではないかと、やらなかったら死ぬときに後悔するんじゃないかと、福岡国際が終わったら8割方心が決まっていました。ただ、発表は100%決まっていたのですが、ポストンで優勝したことで、2011年の東京マラソン後のようにたくさん記者さんが空港に来て、しばらくは練習に支障が出るくらい大変な生活になると思いました。それで、やり方としては悪いんですけど、そこで言えば自分自身も腹をくくれますし、ポストン優勝の混乱とプロ転向表明の混乱を同時に終わらせることで練習に支障が出る期間も短縮できますし、いい機会だと思いい、話してしまいました。

テープを切った瞬間は「ああ、勝った」という感じでしたが、後ろを向くと誰も来ていなくて今まで感じたことがないような喜びが湧き上がってきました。寒さで脚がぐくぐくしていたけれど、呼吸が問題なかったの、意識ははつきりしていました。しかし、自分のしたことを信じられず、夢なのか現実なのか分

オンリーワンになるプロランナーになる

プロになったらこれまでできなかったことをやりたいです。

川内優輝フルマラソン全成績

2009年	2月	別府大分マラソン	20位	2時間19分26秒
	3月	東京マラソン 2009	19位	2時間18分18秒
	12月	福岡国際マラソン	13位	2時間17分33秒
2010年	2月	東京マラソン 2010	4位	2時間12分36秒
	12月	福岡国際マラソン	10位	2時間17分54秒
2011年	2月	東京マラソン 2011	3位	2時間8分37秒
	9月	世界陸上大阪大会	17位	2時間16分11秒
	10月	大阪マラソン 2011	4位	2時間14分31秒
	12月	福岡国際マラソン	3位	2時間9分57秒
	12月	福岡マラソン	2位	2時間12分33秒
2012年	2月	東京マラソン 2012	14位	2時間12分51秒
	4月	かすみぐらマラソン	優勝	2時間22分38秒
	4月	デュセルドルフマラソン	8位	2時間12分58秒
	7月	ゴールドコーストマラソン	4位	2時間13分26秒
	8月	北海道マラソン	優勝	2時間18分38秒
	9月	シドニーマラソン	優勝	2時間11分52秒
	10月	ちばアクアラインマラソン	優勝	2時間17分48秒
	12月	福岡国際マラソン	6位	2時間10分29秒
	12月	福岡マラソン	優勝	2時間10分46秒
2013年	1月	エジプト国際マラソン	優勝	2時間12分24秒
	2月	別府大分マラソン	優勝	2時間8分15秒
	3月	ソウル国際マラソン	4位	2時間8分14秒
	4月	長野マラソン	優勝	2時間14分27秒
	6月	千歳国際マラソン	優勝	2時間18分29秒
	7月	ゴールドコーストマラソン	優勝	2時間10分1秒
	8月	世界陸上モスクワ大会	18位	2時間15分35秒
	10月	メルボルンマラソン	2位	2時間11分40秒
	11月	ニューヨーク・シティマラソン	11位	2時間12分29秒
	12月	福岡国際マラソン	3位	2時間9分5秒
	12月	福岡マラソン	2位	2時間9分15秒
2014年	2月	熊本城マラソン	優勝	2時間10分14秒
	3月	びわ湖マラソン	4位	2時間10分38秒
	4月	さが桜マラソン	優勝	2時間13分02秒
	4月	としまマラソン	優勝	2時間15分25秒
	5月	ハンブルクマラソン	9位	2時間9分36秒
	6月	千歳国際マラソン	ゲスト出場	2時間15分57秒
	7月	ゴールドコーストマラソン	3位	2時間11分27秒
	8月	シティトゥサーフマラソン	優勝	2時間12分55秒
	10月	仁川アジア競技大会	3位	2時間12分42秒
	11月	ニューヨーク・シティマラソン	11位	2時間16分41秒
	11月	福知山マラソン	優勝	2時間12分59秒
	12月	NAHAマラソン	優勝	2時間13分43秒
	12月	福岡マラソン	優勝	2時間9分46秒
2015年	1月	いぶすき菜の花マラソン	優勝	2時間24分10秒
	2月	延岡西日本マラソン	8位	2時間15分16秒
	2月	高知龍馬マラソン	優勝	2時間15分6秒
	3月	ソウル国際マラソン	16位	2時間13分33秒
	4月	チュリッヒマラソン	2位	2時間12分13秒
	5月	カーター記念黒部名水マラソン	優勝	2時間17分58秒
	7月	ゴールドコーストマラソン	8位	2時間16分23秒
	8月	シティトゥサーフマラソン	優勝	2時間16分23秒
	9月	ケプタウンマラソン	9位	2時間16分33秒
	10月	いわて北上マラソン	優勝	2時間13分21秒
	11月	ニューヨーク・シティマラソン	6位	2時間13分29秒
	12月	福岡国際マラソン	8位	2時間12分48秒
	12月	福岡マラソン	2位	2時間12分24秒
2016年	1月	いぶすき菜の花マラソン	優勝	2時間15分14秒
	3月	びわ湖マラソン	7位	2時間11分53秒
	3月	新都市萬金石マラソン	2位	2時間14分12秒
	4月	チュリッヒマラソン	優勝	2時間12分4秒
	7月	ゴールドコーストマラソン	2位	2時間9分1秒
	9月	ベルリンマラソン	13位	2時間11分3秒
	11月	ボルトマラソン	2位	2時間14分32秒
	12月	福岡国際マラソン	3位	2時間9分11秒
	12月	福岡マラソン	3位	2時間12分45秒
2017年	2月	愛媛マラソン	優勝	2時間9分54秒
	4月	大邱国際マラソン	6位	2時間13分4秒
	5月	ブラハマソン	6位	2時間10分13秒
	6月	ストックホルムマラソン	6位	2時間14分4秒
	7月	ゴールドコーストマラソン	3位	2時間9分18秒
	8月	世界陸上ロンドン大会	9位	2時間12分19秒
	9月	オスロマラソン	優勝	2時間15分57秒
	10月	別海町パイロットマラソン	優勝	2時間13分43秒
	11月	ニースカンヌマラソン	6位	2時間15分2秒
	11月	さいたま国際マラソン	優勝	2時間15分53秒
	12月	福岡国際マラソン	9位	2時間10分53秒
	12月	福岡マラソン	優勝	2時間10分3秒
2018年	1月	マンチェスター・ニューイヤーズ・ディマソン	優勝	2時間18分59秒
	2月	北九州マラソン	優勝	2時間11分46秒
	3月	新都市萬金石マラソン	優勝	2時間14分12秒
	4月	ボストンマラソン	優勝	2時間15分58秒



今回得た約160万円の賞金もプロ宣言の一因となった

練習面では、今まで時間的な都合でできていなかった、毎日20km走りとジョギングをして月間走行距離600kmの最低ラインを確保する。それから、レースの少ない夏の暑い時期にはオーストラリア・日光・道東の涼しい場所に籠って練習を積み重ね、これまでに夏場に調子を落とすことで、間に合わないことも多かった福岡国際でもっと走れるのではないかと考えています。

それ以外ではリカバリーの時間を確保したいと思っています。よくプロになったら練習量を増やして故障してしまうのではないかと、と言われますが逆だと思っています。多くの市民ランナーの皆さんも私と同様に悩んでいると思うのですが、練習ばかりしていてケアがおろそかになると故障をするし、ケアばかりに時間を割かれて練習量が減ってしまうと練習の継続性が失われてしまいます。これまでは時間的制約から「練習かケアか」という2択に常に頭を悩ませて折り合いをつけてきました。プロになり時間的制約がなくなることで「練習をキチンとした上でケアもする」ということができると思っています。

また、世界中のマラソンで勝負したいという思いもありました。今回のボストン優勝もその1つでしたが、世界と勝負できる、招待してもらえないというのもあと3〜4年だと思っています。今はパリやロツテルダムやバルセロナは学校行事や業務多忙期で行けなかったり、このレースで記録を出したい、勝負したいと思っても仕事を溜める訳にはいかないので行きづらい部分がありました。また、私がこれまで仕事を離れたのは日本代表時に土日を含めた10日間が最長です。海外遠征時は木曜日から

金曜日に現地に入って日曜日にレース、当日の夜か翌朝の飛行機に乗って帰国、というスケジュールが多いのですが、時間的に慌ただしくリカバリーの時間が取れないと感じていました。ですので、プロになれば、無理なスケジュールを組まずに日本代表の時のように他の海外レースでもよりレースにフォーカスし、レース後にはリカバリーの時間も確保できると思います。

また、多くの依頼を受けてもこれまで時間の関係でできなかった学校での講演などもやりたいと思っています。私はかなり様々な経験をしていますので、そうした世界での経験を伝えていかなければいけないのではないかと考えています。そうした意味で、今のプロとは違う、オンラインのプログラマーとしてやっていきたいです。

自分としては、こうした生活をすれば、2時間7分台は間違いないと思いますし、スピードを戻せば6分台も行けると思っています。2012年ごろにはハーフや30kmで結果を出して6分台も見えていたにも関わらず、その後の2014年末の捻挫を原因とする長期の故障と不調により、達成できずに5年が経過してしまいました。

「働かながらすごい」ではなく1人のランナーとして戦う決断をする上ではそれほど悩みませんでした。自分のやりかた、さいたま国際マラソンも誕生し、大会サポーターという重役もいただきました。今勤務している久喜高校の100周年の仕事も今年で終わり、公務員としてやりたいことはできました。

逆に、最近では海外のレースなどで「なぜプロにならないのか」と聞かれたときに明確に説明できなくなっていました。昔はプロの実業団だと思っていたので、チームに縛られたくないし、自由に練習したいからだと考えていました。藤原新さんなど自由に活動している人を見て、なぜ自分はならないのかと考えるようになりました。スポンサーに縛られたくないと話すこともありましたが、あまり縛られないスポンサーが現れたらどうなんだろうと思ったり、そもそもスポンサーがいなくても賞金やこれまで得られなかった出場料で生きていけるのではないかと感じていました。

また、いつまでも若いころに発言した「実業団には負けたくない」「実業団はお金をもらって走っているけれど私はお金を払って走っている」とかそういう部分を取り上げられていることも違和感を感じていました。日本代表にも何度もなり、ニューヨーク・シティで6位になったり、様々な海外マラソンで結果を残してきた、「働かながらすごい」という

評価が多くて、「公務員」という前提があった上での評価は良い評価も悪い評価ももういいのではないかと。「スタートラインに立てば実業団も公務員も無職も同じ」という前田（和浩）選手の言葉どおりだと思っています。どれだけ頑張っても実績を残しても、マラソンランナーとしての実績では正当に評価されないのではないかと感じていました。それならば、正当に評価してもらえないように「公務員」を辞めて、プロとして自分の可能性を試したいというのがありました。若い時は視野が狭く、実業団やプロがどうなのか、世界のマラソンとは何か

というのを全く知らなかったんです。今はいろいろな人の影響も受けて、だいぶ考え方も変わってきていると思います。2020年の東京五輪のマラソンは日本人にメダルを取ってほしいと思っています。私自身も1人のマラソンファンですから。今回のボストンで、寒さに異常に強ければ世界選手権金メダリストや五輪のメダリストにも勝てるかと証明できました。これは逆もしかりだと思います。今まで、世界記録とのタイム差を見て、「日本人は勝てない」

と言われていましたが、東京では暑さに強くてそれなりの走力がある選手ならメダルが獲得できると思っています。MGCのおかげでそういった選手が代表に選ばれると思います。私としては苦手とする暑い東京五輪で勝負する姿は全く想像ができません。ですので、私が今回のボストン前に過去の成功率100%の寒い雨マラソンの経験から想像できたように「自分自身がメダルを獲得」と「そのためのプロセスを明確に説明できる」選手が東京五輪のマラソンに挑むことが大切だと思います。誰がじゃないんです。誰でもいいから日本人がメダルを

取れば、日本のマラソンとしてはいいと思うんです。私としては、今まで参加できなかった陸連合宿などに一部分でも参加して、東京五輪の銅メダリストの岡谷選手を同僚の自衛隊の選手が練習パートナーとして支えたように、五輪でメダルを狙える選手の練習パートナーになることで東京五輪に貢献できればいいのではないかと考えています。「チームジャパン」として。それで私も「チームジャパン」の東京五輪のメダル獲得から刺激をもらって、その後の得意とする秋から春のマラソンで結果を残すことができたらと思っています。

長い目で見たら2021年の世界陸上（アメリカ・ユージーン）を狙ってみようという思いはあります。「代表引退」は公務員として仕事と両立しながら時間的制約のある中では、「日本代表と公務員」という2方面からのプレッシャーに耐え続けることは限界だと思つたから言ったのであって、比較的涼しいユージーンで、ロンドン世界陸上で得たものを生かせばもう少しやれると考えています。苦手な分野はその分野が得意な人に任せ、自分自身は得意な分野で自分の実力を100%発揮して戦うことができたいと思っています。

家族が語るボストン優勝③

兄が地元で愛されていることを改めて実感する機会に

兄の優勝は早朝のTVのニュースで知りました。私は久喜市議に立候補しており、ボストンの前日が公示日でした。「すごいことをしたな」と思いながら久喜駅で街頭演説に立つと、出勤する人たちが次々に「おめでとう」という祝福の声をかけてくれました。久喜市の皆さんは兄が最初に日本代表に選ばれた2011年から、定期的に激励会や報告会を開いてくれ、大会にも有志を募って度々応援に来てくれています。私も選挙期間中、「川内家がマラソンでこの町を盛り上げてくれている」と声をかけられ、改めて兄がこの町から愛されていることを感じました。兄の活躍も追い風になり、選挙では目標の2倍以上の票を獲得し、当選できました。（三男、鴻輝さん）

「賢く、強く、恐れずに戦え」

文：ブレット・ラーナー 訳：東海林美佳

2011年から川内選手の海外レース派遣交渉を担っているブレット・ラーナー氏が綴る「悲願」



今年元旦、零下17℃の中、ニューイヤーマラソンを走る川内選手。2時間18分59秒で完走し、「寒さ対策」になったことの違いはない

近所の陸上トラックで川内優輝を見つけた

私はウエズリヤン大学の出身だ。先輩には、ボストンマラソンで4度の優勝を誇るビル・ロジャースがいる。1994年ボストンマラソンのエキスポで、当時20歳の私は、憧れのビルのサインをゼッケンにもらって有頂天になったものだ。

3年後、私は日本に住むことになり、いくつもの偶然が重なった末、ある日近所の陸上トラックでひとりのティーンエイジャーを見かけた。名前を川内優輝という。最初から彼はどこか違っていた。2011年東京マラソンの後、彼は電話をくれた。海外のマラソンに出場したいので力になって欲しいという。

川内の活躍はボストンマラソンの目にも留まるようになる。だが、なかなか出場は実現しなかった。2017年、私はボストンでのビル・ロジャースとレッドソックスの試合を観戦することになった。フェンウェイパークのVIP席で、私は彼に川内へのメッセージをもらった。ビルはこう呼びかけた。「やあ、優輝。ビル・ロジャースです。君はまだボストンを走っていないよね。ボストンを絶対走

るべきだ」。私はその場で川内にその動画を送り、30分後には返事が来た。「OK。走ります」

私たちは、川内の休みがとれる年末年始にコース下見を決行することにした。吐く息が顔で凍る寒さの中でコース前半を試走した後、川内はこう言った。「箱根6区の練習日誌を引っ張り出さない」と

その夜のデザイナーの席で、ビル・ロジャース、ジャック・フルツ（※1）、ボブ・ホッジ（※2）ら偉大なボストンの先輩たちは、川内に攻略法を伝授した。中でも貴重だったのはビルの話だ。1979年、瀬古利彦を制して優勝したレースについて、こう明かしてくれたのだ。「彼は私より才能があった。勝てた理由はひとつ。彼はコースを知らなかった。そして、私は熟知していた」

頭を使ってライバルに挑む

川内も私もわかっていて。倒すべき相手はゲーレン・ラップ（※3）だ。リオ五輪銅メダリスト、昨年のボストン2位とシカゴ優勝。アルベルト・サラザール（※4）の秘蔵っ子で、潤沢な資金と最新テクノロジーを注入されたナイキマシーン。

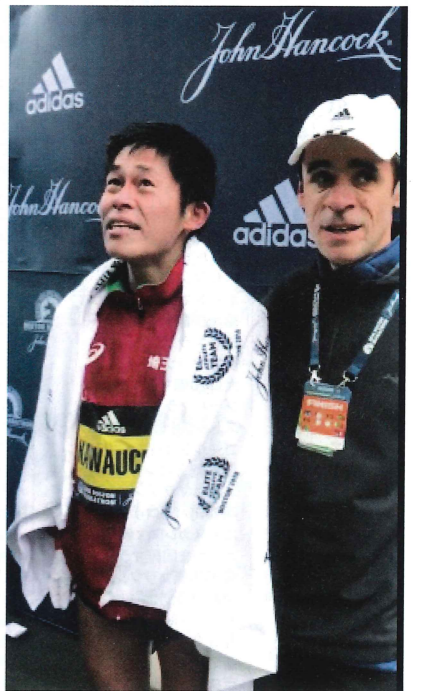
記録ペースで駆け抜けたのだ。主力選手たちの集団は数秒遅れで後ろについた。ここでの狙いは3つ。

- ①早いうちに集団の人数を絞り、状況を把握しやすくする。
- ②ボストンの常識にとらわれている選手に不安と疑念とストレスを与える。
- ③常識を知らない選手にダメージを与え疲労を蓄積させる。

そう、アリとフォアマンのように。アリはこう囁きかけた。「来いよジョージ。お前のパンチはそんなものか。俺を打てよ」。挑発に乗ってしまったフォアマンは我を忘れてパンチを浴びせた。アリがひたすらその時を待ち耐える間、何かに取り憑かれたかのように打ち続け、体力を消耗させていった。

川内のライバルたちも策に見事にはまった。速いペースにつられて最初の5kmを2時間7分台のペースで通過。集団が追いつくと、川内はそのまま先導させて雨風にさらし、自身は後方に一旦下がる。集団は相当のハイペースで進んでいた。

フェーズ2。打倒ラップ大作戦。レース中盤、ペースが落ちそうになると川内は何度も仕掛



ナイキオレゴンプロジェクトは彼のために存在しているといっても過言ではない。「マラソン界のロッキー」

上田埼玉真知事は川内をそう呼んだが、今回はまさに「ロッキー4」であった。コーチも、スポンサーも、資金も、最新テクノロジーも持たず、フルタイムで仕事をしながら走る男が、強大な相手に立ち向かうのだ。

どうやって？ 頭を使って。これまでのラップ、そしてチームメイトの大胆な見れば、ナイキオレゴンプロジェクトの作戦がワンパターンなのは明白。30kmまで力を温存し、その時がきたら「Let Do It」。温存してスタート。それしかない。ラップがスタートをかける箇所も容易に予測がつく。ハートブレイクヒルだ。つまりラスト10kmを無力化すれば、彼の策は尽きる。

常識を打ち破ることでキャリアを築いてきた

予報の上をいく悪天候とともに夜が明けた。ホプキントンへバスで向かう道中、我々はひとつも言葉を交わさなかった。川内は音楽を聴いていた。私は吹きすさぶ暴風雨を窓越しに眺めていた。2列先にはラップとサラザール。ラップは何かの電器器具を耳の後ろのリンパ節に貼り付けていた。サラザールはまっすぐ前を見つめていた。川内がスタートへと向かう前

けて揺さぶりをかけ、ラップや他の選手の体力温存を阻止した。ラップはずっとラクな様子で先頭集団にいたが、川内の最後の揺さぶりで集団は割れ、つけなくなった後方集団にラップがいた。最初はほんの数歩、やがて差は広がりその姿は視界から消えた。彼は棄権した。

レース中盤、川内の揺さぶりの合間で、数人の選手が交代しながら先頭を引っ張った。川内はそれを無視していたが、昨年の覇者ジョフリー・キルイ（ケニア※5）が先頭に立った時に限り、すぐ後ろを走った。何度か繰り返されるうちにキルイもそれに気付き、集中力に小さな亀裂が生じ始めた。小さな奇立ち、わずかな動揺。25km過ぎの坂、川内の最後の揺さぶりに対して、キルイは過剰に反応した。

わずかな人数の先頭集団を置き去りにし、単独リードを広げた。「あれにはつかなかった」と川内。「でも、時期回早すぎたので、あまり気にしませんでした」

フェーズ3。キルイ追撃。35km地点でキルイは川内に1分半以上差をつけていたが、クリーブランド・サークルを左折すると強い向かい風をもろに受け、苦しみ始めた。一方で勢いを増す川内はほとんど差を詰めてい

く。「到着してから毎日ここを走ってききましたからね」と川内。「前へ、前へ、前へ。それだけ考えて走りました」

川内は31年ぶりにこのレースの日本人優勝者となった。そして、男女通じて日本人初のワールドマラソンメジャーズ大会の勝者に輝いたのである。元マラソン日本記録保持者が私にメールをくれた。「同じ日本人として誇りに思います」

どんな状況でも戦える準備をしていた

それはいかにして起こったのか？ 天候においては幸運だったが、それだけではない。川内はどんな状況でも戦える準備をしてボストンにやってきました。彼は賢く、強く、恐れず戦った。マラソンにおいて、ここまで完全にレースをコントロールしたのは北京五輪（金メダル）でのサミュエル・ワンジル以来ではないだろうか。

ゴール後に彼はこう言った。「まるで運命のように感じます。レース中ずっと、ブレットさんが私に言ってくれたことが頭にありました。『君は、この日のために生まれたんだ』と。やはり、ボストンを走ってよかったです」

(※4) アルベルト・サラザール●1980～1982年のニューヨーク・シティマラソン3連覇。1982年のボストンマラソン優勝。現在はナイキ・オレゴン・プロジェクトで指導。(※5) ジョフリー・キルイ●2017年に2時間9分37秒でボストンマラソン優勝。ロンドン世界陸上マラソン金メダリスト

(※1) ジャック・フルツ●1978年ボストン4位。(※2) ボブ・ホッジ●1979年ボストン3位。1982年別府大分で優勝(2時間15分43秒)。(※3) ゲーレン・ラップ●ナイキ・オレゴン・プロジェクト所属の米国ランナー。2016年リオデジャネイロ五輪男子1万mで5位入賞(27分8秒92)、マラソンで銅メダル(2時間10分5秒)。